

小中連携の手引

札幌市教育委員会

平成28年3月

はじめに

近年、少子高齢化や家族形態・地域社会の変化とともに、様々な文化・価値観が国境を越えて流動化するなどのグローバル化が急速に進んでおり、これに伴い、子どもを取り巻く環境も複雑化・多様化しています。

そのような中、子どもが小学校から中学校に進学し、新たな環境の中での学習や生活へ移行する段階において、不登校やいじめ等の問題行動等が増加する、いわゆる「中一ギャップ」等が学校教育における今日的な課題の一つとして指摘されています。

このような状況を踏まえ、平成26年4月から実施している「札幌市教育振興基本計画」における「札幌市教育アクションプラン（前期）」において、子どもが個性や能力、興味・関心を継続して伸ばしていけるよう、一貫性・連続性のある学びを実現するために、異なる学校種間などの学びの場の連携を推進することを基本施策の一つに掲げ、小中連携の取組の充実を図ってきています。

小中連携の取組においては、例えば、小学生が中学校生活の一部を体験したり、小学生と中学生が直接交流したりする機会を充実させたりすることなどを通じて、小学生の中学校進学への不安を和らげるとともに、中学生の自己肯定感を高めるなどの教育効果が期待されます。今後の学校教育においては、このような小中連携の効果を一層高めることを目指して、小学校と中学校の間にある子どもの発達段階に応じた指導方法・内容等の違いを踏まえつつ、それぞれの段階に応じた特性の理解や指導方法等の改善を図るなど、義務教育9年間の連続性ある教育を一層充実していくことが重要であります。

札幌市においては、これまでも、中学校への入学前に、小学校と中学校の間における情報の共有など、各学校独自の取組が行われてきていますが、本手引においては、その先進的な取組や推進に当たってのポイントなどを掲載しております。

各学校においては、本手引を積極的に活用し、これまで以上に小学校と中学校の間の連携・接続に向けた取組を充実し、子どもがより一層安心して楽しく学び、生活できるような学校づくりが進められることを期待しております。

平成28年3月

札幌市教育委員会

教育長 長 岡 豊 彦

目 次

◆はじめに

◆第1章 小中連携の必要性・意義……………2

◆第2章 小中連携をどのように進めるか ……8

I 「交流」「連携」「接続」…小中連携を進めるためのステップガイド……………8

II 実践編

【交流】 「中学生ってすごい！」……………10
～合唱コンクールでの交流から憧れと誇りを生む～

【交流】 中学生による小学校訪問……………12
～プレゼンテーション「宮中のいいところ紹介」～

【連携】 ネットトラブルについて考えよう……………14
～トラブルを未然に防ぐために小学校で育てる力～

【連携】 小中連携担当者会議……………16
～夏の授業体験、冬の交流会等のもち方について～

【連携】 9年間を通じて子どもたちを育む小中学校間の討議の工夫…18
～教師の連携を深める～

【接続】 「中学校進学への不安が減ったよ」……………20
～中学校での体験授業を通して～

【接続】 中学校の授業を出前！……………22
～「分かる・知ってる」から始まる中学校の授業と生活～

【接続】 「ポロカル発信会に参加しよう」……………24
～自らの学習にフィードバックさせる学習を目指して～

◆第3章 小中連携の効果と今後への期待……………28

I 小中連携の効果について

II 今後への期待

【資料】平成22～26年度の札幌市研究開発事業における「小中連携」に関する
実践研究の成果等について

【本手引で使用している用語について】

札幌市では、小学校の2学期の始業式が中学校より数日早いため、中学校の夏季休業期間中に、中学校教員が小学生に向けた授業を行いやすい等のメリットがある。本手引では、これを「長期休業期間の違いを生かした、乗り入れ授業（体験授業）」と呼ぶこととする。

第1章

小中連携の必要性・意義

- I 子どもを取り巻く環境の変化
- II 札幌市における小中連携の位置付け
- III 札幌市における小中連携の取組
- IV 小中連携の推進に当たって

第1章 小中連携の必要性・意義

I 子どもを取り巻く環境の変化

社会の変化 と 教育課題

学校における子どもの学習指導上、生徒指導上の様々な課題については、各学校単位で解決を図るとともに、複数の学校段階間で連携し、課題解決に当たる取組が従前から行われてきたところである。

しかし、今日、少子高齢化や急速な情報社会の進展、グローバル化など、子どもを取り巻く社会状況の急激な変化に伴い、子どもに関する課題がより一層多様化、複雑化する中にあるのは、学校段階を超えて、子どもに関する教育課題を共有し、連続性のある教育を実現していくことが求められている。

<参考>

○発達の早期化

- ・「学校の楽しさ」、「教科や活動の時間の好き嫌い」について、小学校4年生から5年生に上がる段階においても肯定的回答をする児童の割合が下がる傾向
- ・小学校4～5年生頃に児童生徒にとっての発達上の段差が存在しているとの指摘や、いわゆる「中1ギャップ」と呼ばれる現象の芽は既に小学校高学年から生じているとの分析もある。

○いわゆる「中1ギャップ」への対応

- ・いじめの認知件数、不登校児童生徒数、暴力行為の加害児童生徒数が中学校1年生になったときに大幅に増えるなど、児童が小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活に不適應を起こすいわゆる「中1ギャップ」が指摘されている。

～「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築（答申）中央教育審議会（平成26年12月22日）から抜粋～

II 札幌市における小中連携の位置付け

(1) 「自立した札幌人」の育成

札幌市の 教育が 目指すこと

札幌市においては、札幌市教育振興基本計画（平成26年4月～）において、一人の人間として「自立」とするとともに、他者を自分と同じ「自立した存在」として尊重し、共に支え合いながら生きていくという「共生」の思いを併せもつような「自立した札幌人」の育成を「札幌市の教育が目指す人間像」として掲げている。

自立した札幌人

この目標のもとで、子ども一人一人の心身の発達の段階と学校や地域の実態を踏まえ、札幌の自然や社会、文化等の豊かな環境を生かしながら、「学ぶ力ー知」「豊かな心ー徳」「健やかな身体ー体」の調和のとれた「生きる力」を育んでいくことを大切にしている。

「自立した札幌人」の育成に向けては、幼稚園（認定こども園）や保育園、小・中・高等学校、中等教育学校、特別支援学校が、互いの教育内容や指導方法等について理解を深めるとともに、そのような相

互理解を通じて、自校（園）の教育活動等の役割への自覚を一層高めていくことが重要である。

とりわけ、小・中学校については、学校教育法の改正（平成19年改正）において、小・中学校共通の目標として「義務教育」の目標規定が新設されるなど、学校段階間の連携を深めることが求められており、学校種の枠を超えて、目標を共有し、教育活動等の充実を図っていくことが重要となっている。

(2) 小中連携の位置付け

小中連携に係る施策

札幌市教育振興基本計画では、札幌市教育アクションプラン（前期）において、「施策 1-6-1 異校種体験・異年齢間交流の充実」「1-6-2 校種間の連携による連続性のある教育活動の充実」を掲げている。

【施策 1-6-1】異校種体験・異年齢間交流の充実

○子どもが異なる校種を体験する機会や、異なる年齢間で交流する機会を充実させることによって、子どもの進学先への不安を和らげ、将来を見通した学習への興味・関心や学ぶ意欲を高めていきます。また、例えば小学生と中学生が交流する場合、中学校生活について知ることができるという小学生にとっての利点だけでなく、中学生にとっても、小学生の役に立っているという思いを抱き、自己肯定感等の高揚につながるなどの効果が期待されることから、異年齢集団の体験等を通じて自己肯定感や規範意識の向上につなげていきます。

【施策 1-6-2】校種間の連携による連続性のある教育活動の充実

○教職員が、異校種への理解を深めることができるよう、教科や領域等の指導方法や指導内容、子どもの学習状況等に関する異校種の教職員による情報交流会や合同研修会の機会を充実させるとともに、子どもの育ちや学びの共有や校種間の接続を意識したカリキュラム開発などを通じ、校種間の連携による連続性のある教育活動の充実を図ります。

これらの施策を踏まえ、札幌市における小中連携においては、子ども自身が異なる校種の授業等を体験したり、子ども同士が交流したりする機会を充実するなどし、自己肯定感や規範意識等の向上を図ることが重要となる。また、教育活動の連続性を確保していくため、教職員が異校種の教育について理解し、学校段階の接続を意識した教育活動の実現を目指していくことも大切である。

(3) 札幌市学校教育の重点を踏まえて

子どもへの指導の連続・接続

「札幌市学校教育の重点」においては、「学校教育の今日的課題」の一つに「校種間連携」を位置付けている。この中では、子どもへの指導は、各学校段階内において完結するものではないという観点から、校種間連携をより一層推進することにより、異なる学校段階にわたって教育を見通し、円滑な各学校種間の連続・接続に向けた取組を推進することとしている。各学校においては、これを踏まえて、小中連携を活性化させることが必要である。

小中連携の
視点

また、小中連携を推進する上では、「札幌市学校教育の重点」における、「知・徳・体の調和のとれた育ち（学ぶ力・豊かな心・健やかな身体）」「札幌らしい特色ある学校教育」「学校教育の今日的課題」「信頼される学校の創造」についての具体的な方針等を踏まえて、取組を推進していくことが重要である。

◇学校教育の重点を踏まえ、以下のような「小中連携の視点」から、小中学校が互いの取組の目標や具体的な取組等について情報共有したり、意見交換したりしながら、義務教育9年間を通じたよりよい教育活動となるよう、組織的な連携を進めるとともに、教育課程の接続に向けた工夫改善を図っていくことが考えられる。

学校教育の重点	小中連携の視点
1 知・徳・体の調和のとれた育ち ・学ぶ力 ・豊かな心 ・健やかな身体	○「学ぶ力」育成プログラム、「健やかな身体」育成プログラム、「学校いじめ防止基本方針」、子どもの命の大切さを見つめ直す月間の取組などについて、各学校種の計画等を基に連携を深める。 *進路探究学習やボランティア活動等の体験活動、学校行事を通じた小中学校の交流など、具体的な取組と上記の計画等を関連付けて実施。
2 札幌らしい特色ある学校教育 【雪】【環境】【読書】	○【雪】【環境】【読書】をテーマにした教育活動について、取組の交流や計画の見直しを行うなど、これまでの活動を基に連携を深め、教育活動の充実を図る。
3 学校教育の今日的課題 ・校種間連携・特別支援教育 ・人間尊重の教育・国際理解教育 ・情報教育	○学校教育の今日的課題について、取組の交流や計画の見直しを行うなど、これまでの活動を基に連携を深め、教育活動の充実を図る。
4 信頼される学校の創造	○家庭や地域への情報発信の機会や共同で開催する行事等を小中学校が連携して進めるなどし、家庭や地域とともに進める学校づくりを充実する。

Ⅲ 札幌市における小中連携の取組

これまでの
取組から

札幌市では、平成22年度から札幌市研究開発事業において、「小中連携」に関する実践研究を推進してきた。

実践研究においては、小中連携による様々な取組が実践されてきた。この研究では、札幌市における長期休業期間の違いを活用して、小学生が中学校に出向いて中学校の英語や理科の授業を体験したり、部活動を見学したりするなど、子どもが直接体験することや子ども同士が交流することを促進する事例が見られた。また、教員同士が互いの授

業を参観し、異校種の授業から指導方法等を学び合う取組、小中学校間で行事等の指導の目的や実施方法等を共有し、一貫性を確保することなどが見られた。

教育委員会では、これらの事例を、そのねらいや内容から検討し、小中連携には、P8に示したような、「交流」、「連携」、「接続」の観点があると整理している。

本手引の実践事例については、各学校における推進の参考となるよう、この三つの観点を踏まえて掲載している。

<札幌市研究開発事業における取組から> (平成22~26年度)

- 長期休業期間を利用した中学校での体験授業や部活動見学、保護者説明会などの実施
- 中学校の教員が小学校の授業を参観することで、学習内容の連続性を踏まえた指導の充実を推進
- 中学校教員の専門性を生かした研修の実施
- 学校行事や総合的な学習の時間などで一貫性のある指導を推進 (同一の地域施設等を活用する場合などの重複を整理)
- 小中連携の取組の柱と継続的に実践できる体制づくりが充実
- 小中連携の必要性・重要性に対する教員の理解促進 など

IV 小中連携の推進に当たって

取組を通じて相互理解を

小中連携の推進に当たっては、実際に個別の交流活動等を実施するなど、教職員や子どもが直接つながるところから始め、顔の見える関係をつくっていく段階を経ることが必要である。小中学校が互いの教育活動の特性を理解したり、子どもの実態を把握したりすることが重要となる。

具体的な小中連携の取組については、例えば、以下のような例が考えられる。

(学習指導)

- 1 小中の交流を意識し、触れ合いの中から見通しにつなげ、進学時の安心感を育む活動の充実
- 2 小中の連結を強く意識する教科・領域等の活動を内容とするカリキュラム内容の系統性の整理
 - ①算数科と数学科、小学校外国語活動と英語科、小・中理科、総合的な学習の接続的な内容、といった接続または一貫できる内容を明確に押さえておくことが重要
 - ②地域に根ざす学校という視点から、子どもが共通に参加する地域行事や学校行事の整理
- 3 学習内容が連続する異校種間を貫くカリキュラムの位置付け

(生徒指導)

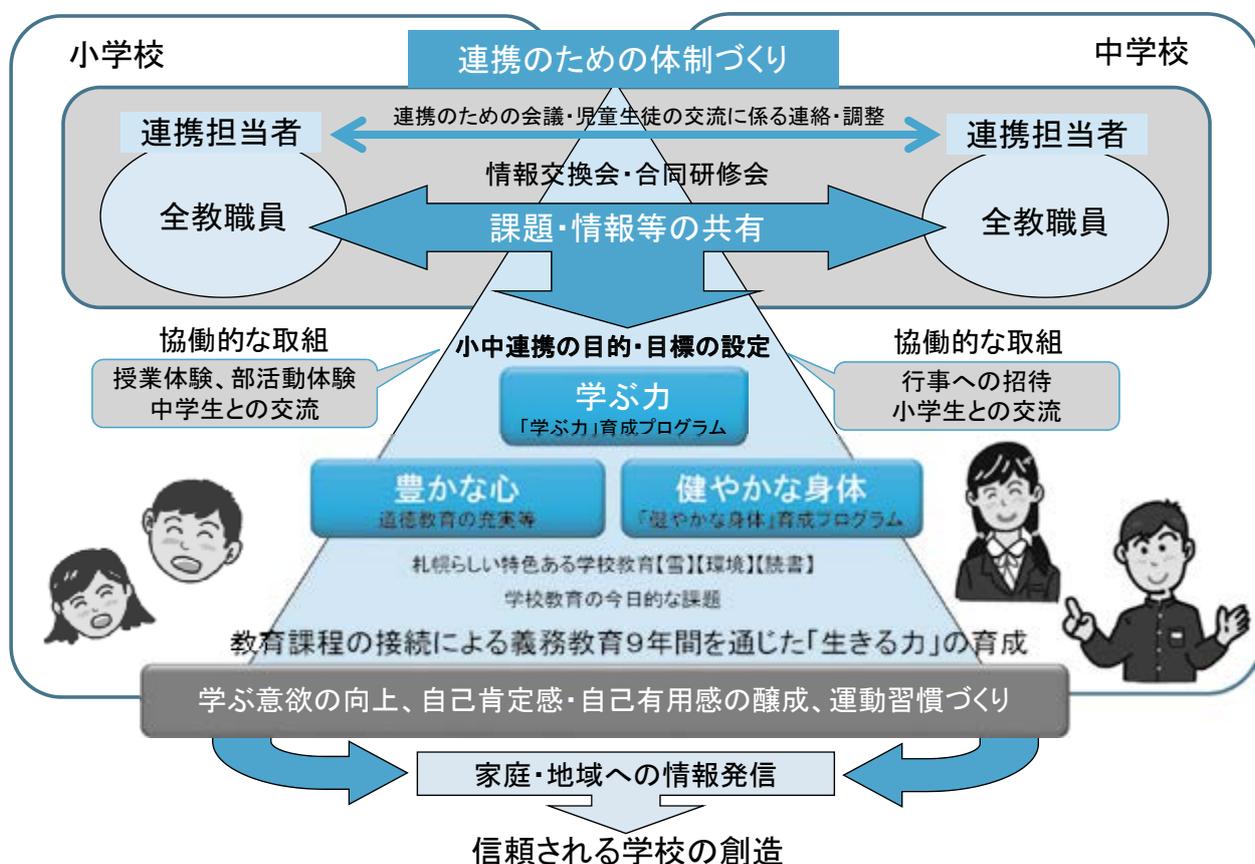
- 1 生徒指導の方針、児童・生徒個々の生徒指導計画、学びの支援の接続等についての小・中学校間の情報の共有
- 2 いじめや不登校の解消につながるような、小学生の中学校生活に対する意欲を高め、中学生の自尊感情を高める活動の充実
- 3 情報モラル等の今日的な課題について発達の段階に応じた適切な指導の充実

計画的・
継続的な
取組を

また、計画的、かつ、継続的に取組を推進するための、計画づくりや連携体制の整備も大切になる。

計画づくりは、小中連携の目的・目標を設定することが重要である。小・中学校間で、子どもの実態を共有し、どのような力を身に付けていきたいのか、連携の重点は何かなど、教職員が意見交換を通じて明確にしていくことが大切である。そのためには、小・中学校において、小中連携を推進するための担当者を位置付けることや、担当者を委員とする連携推進のための会議を設けることなどが考えられる。

さらに、全教職員で小中連携の必要性や意義を理解し、共有できる体制を整備することが、計画的・継続的な取組につながっていくと考える。



第2章

小中連携を どのように進めるか

I 「交流」「連携」「接続」

小中連携を進めるためのステップガイド

II 実践編

第2章 小中連携をどのように進めるか

◆小中連携の推進に当たって

札幌市においては、小学校と中学校との間で、進学前の時期に教員同士の情報交換や学校行事の参観などを実施してきている。小学校によっては、複数の中学校に進学する場合があります。小中連携に当たって工夫が必要なケースも見られているが、第1章で述べたような小中連携の必要性や意義を踏まえ、今後、学校事情等に応じつつ、本章において示す取組のポイントを参考にしながら充実を図っていくことが重要である。

本章においては、小学生にとっても、中学生にとっても意義ある小中連携とするために、小中連携の取組を「交流」「連携」「接続」の三つの観点から、それぞれ実践例を掲載している。各学校において、9年間の子どもの育ちを見据えながら小中連携を推進するための参考としていただきたい。

I 「交流」「連携」「接続」…小中連携を進めるためのステップガイド

交流

「交流」とは、小中学校間で、学校行事や総合的な学習の時間の学習活動等を通じて、児童生徒が直接交流することなどを指す。

小学生にとっては、中学生と行事等を通じた交流をすることで、日頃、触れ合う機会の少ない中学生の姿から学んだり、中学校生活に憧れを抱いたりすることにつながる。中学生にとっては、共に活動する相手としての小学生を意識することで、自己有用感を高めるきっかけになることが期待される。

連携

「連携」とは、小中学校間の教員同士が意見交換や情報共有しながら、子どもに育てたい力（目標）などを共有した上で、小中学校がそれぞれ授業改善に生かしたり、共同で行事等を企画・実施したりすることなどを指す。

具体的には、小中学校間で、教員が児童生徒の情報や課題を共有する機会を設け、それを基にそれぞれの学校で学習内容を工夫したり、共同で行事を開催したりするなど、教員間の連携を生かした取組である。小・中学校の教員は、それぞれが、児童生徒の実態や特性に応じた指導方法等をもっており、小中学校間で、情報や指導方法等を共有し、それぞれの学校での指導に役立てることは重要なことである。

接続

「接続」とは、発達の段階に応じて、育ちの連続性を考えながら、小中学校が共同で行事や教科の学習などを検討し、つながりのある教育活動を行うことなどを指す。

具体的には、教科等の学習について、小・中学校9年間の円滑な接続が図られるよう、教育課程を共同で検討したり、その内容を踏まえて、乗り入れ授業を行ったりすることなどが考えられる。例えば、小学校外国語活動と中学校外国語、理科や総合的な学習の時間などについて、教育課程の接続の視点をもって取り組むことにより、指導内容の重複の防止や、より効果的な指導が可能となる。

小中連携のためのステップ

- ① 中学校区内の小・中学校がお互いの信頼関係の上に連携することで、充実した子どもの成長につながることを共通認識する。
- ② 連携の目的を明らかにする。

例・子ども像の確立 ・児童生徒の課題の共有 ・学習指導の相互理解 ・生活指導の相互理解 ・不登校等の生徒指導上の課題の解決 ・学ぶ力の育成 ・豊かな心の育成 ・健やかな身体の育成
--
- ③ 各学校の目指す子ども像及び抱えている課題等を交流し、実施可能な連携事業を探る。
- ④ 各学校の主要行事を見据えて、どの時期にどの事業を実施できるかを模索する。
- ⑤ 準備も含めて実施に関する日程を定め、各校の小中連携担当者を中心に推進する。
- ⑥ 各事業実施後は、教師及び児童生徒の感想や意見をまとめ、今後に生かす。



目指すべき 小中連携四つの視点

- 1 子ども理解の一貫性
- 2 教育目標の一貫性
- 3 学習指導の継続性
- 4 学習内容の系統性

小中連携の観点と取組例



◆中学生によるオリエンテーション ◆合唱コンクールの鑑賞と交流 ・授業参観と交流会（小中相互） ・中学生による小学生への読み聞かせ ・学校行事の見学（文化祭など）	◆教師の連携（小中連携担当者会議） ◆グループ討議による地域の子ども育成 ・校区内の公園等の清掃活動 ・小中合同開催の道徳講演会 ・学びの支援全体交流会	◆中学校の教科担任の授業を体験（小学6年生） ◆系統性のある授業「ポロカル（札幌カルチャー）発信会」 ・全児童生徒参加の野菜づくり ・授業参観（中学生の授業に参加） ・カリキュラムの共同制作
---	--	---

◆印は本手引にて紹介する実践例である。

ポイント

- ◆ 中学校区内に複数の小学校がある場合は、中学校が中心となって企画・推進する。
- ◆ 地域の特性（公共施設、文化、自然環境等）を生かした特色ある連携を図る。
- ◆ 参加できない学校へは、活動の記録（ビデオ等）を送付することで共通理解を促す。
- ◆ 授業交流は、できるだけ多くの教科で実施し、多様な指導方法等の情報を共有する。
- ◆ 児童生徒間、教員間、教育課程などの連携する取組の形態も考慮し、充実を図る。

Ⅱ 実践編

交流

学校行事で交流を活性化

「中学生ってすごい！」

～合唱コンクールでの交流から憧れと誇りを生む～

米里小学校

ねらい

○米里中学校の合唱コンクールに参加し、鑑賞する活動を通して、中学生の歌声のよさと参加態度の素晴らしさを学び、中学生に対する憧れの気持ちをもったり、自分たちの歌声に学びを生かしたりしていこうとする態度を育てる。

○中学校の行事に参加することにより、中学校の様子やそこで学ぶ先輩たちの姿を知らせ、入学へ向けての期待感を膨らませるようにする。

Kitaraで 光ろう

米里小学校のある白石区では、区のPTA主催で、「Kitaraで光ろう」という行事を行っている。札幌市が世界に誇る「札幌コンサートホールKitara」の大きなステージの上に子どもたちが立ち、音楽の発表を行うものである。

本校の6年生児童もKitaraでの発表に向けて、練習を重ねてきた。本番直前に、米里中学校の合唱コンクールへの参加の機会をいただき、先輩の歌声や姿から多くのことを学ぶために中学校へ向かった。特別活動として2コマで実施した。



交流から 児童が学 んだこと

この訪問が約44%の児童にとって初めて米里中学校へ足を踏み入れる体験となった。「中学校ってどんな所だろうか？」という思いをもちながら合唱コンクールへ参加した。

本校児童が鑑賞したのは中学3年生の合唱であった。上位入賞を目指して練習を積み重ねてきた最上級生としての歌声の素晴らしさ、学級単位にもかかわらず、大きな体育館に響き渡る声、そして、その歌声を真剣に聴く中学生の参加態度に子どもたちは多くの思いをもったようである。以下、子どもたちの声を掲載する。



- ・私はドキドキしました。理由は6年生が中学校に入った時にすごい歌声が聞こえたからです。
- ・中学生から学んだことは、はっきりと落ち着いて歌うことが大切だということです。心がこもっていて、歌の伝えたいことや思いが分かりました。

- ・強弱の付け方で、歌がすごく良くなるということが鑑賞する側になってみて感じました。
- ・指揮者や司会も全部自分たちでやるのはすごかったです。特に、指揮者をやっているなんて驚きでした。
- ・移動の時には驚きました。「見られている」ということを意識して、足音から何もかもが静かでした。

多くの児童が中学生の素晴らしさについて目を輝かせて語る事ができた。また、触れ合いの時間は短かったものの、中学生に対する感想も聞くことができた。

- ・とても明るく、あいさつもしてくれました。普段の生活から人との関わりを大切にしているのだと思いました。
- ・先生方や中学生のみなさんがやさしそうな感じなので、中学生になるのがとても楽しみになってきました。

そして、「中学3年生の合唱を観たら、自分も合唱コンクールで歌いたくなった。」という感想も多く見られた。その二日後、子どもたちは、中学生から学んだことを胸に、Kitara のステージに立ち、練習の成果を発表することができた。

中学生の 立場から

さて、中学生から見た時に、この交流はどのような意味があったのであろうか。中学生の思いを伝えていただいた。多かったのは、「しっかりと自分たちの歌を歌うために集中していて、小学生のことを考える余裕がなかった。」というものであった。このコンクールにかける、生徒たちの正直な思いであろう。その中からいくつか掲載する。



- ・しっかりと歌って格の違いをみせてやろうと思った。
- ・6年生は来年中学生だから、米中の生徒の姿を見て、中学に入学するのが楽しみになってほしいと思って頑張った。
- ・中学生になったら、少ない人数でもこんなにすごい合唱ができるんだなと思ってもらえたら嬉しい。

このように、誇りをもって歌う姿で小学生にメッセージを送っていたことが分かった。

ポイント

- ◆ 交流はできるところからスタートすることが大切。小さな交流でも意義は大きい。
- ◆ 行事への参加等の交流は計画を立てやすく、一度位置付けると、何年も継続して行うことができる。
- ◆ 子ども同士の交流も大切だが、まず小中の教師が顔見知りになって、子どもの話題を共有できることがとても大切である。

交流

中学生の総合的な学習の時間
に小学生が参加して交流

中学生による小学校訪問

～プレゼンテーション「宮中のいいところ紹介」～

宮の森中学校

ねらい

- 中学生のプレゼンテーションを受けることで、小学生の中学校入学後の不安や戸惑いを解消するとともに期待感を膨らませる機会とする。
- 中学校の様子や良いところを紹介することで、中学校1年生に先輩としての自覚を促し、愛校心を育む場とする。

校区内 小学校へ の訪問

まもなく中学校へ進学する小学校6年生に中学校生活の様子などを説明し「宮の森中学校のいいところ」を紹介する場として、校区内の小学校を訪問してプレゼンテーションを実施している。プレゼンテーションを行うのは1年前にプレゼンテーションを受けた中学1年生である。



宮中の いいところ 紹介

毎年2月に校区内の二つの小学校を本校の中学1年生全員が2グループに分かれて訪問し、中学校生活についてプレゼンテーションしている。発表内容は『宮中のいいところ紹介』として、生活のきまり、中学校の行事、部活動など九つのテーマが設定されている。対象は小学校6年生全員で、プレゼンテーションの後で多くの質問が飛び交う。2か月後に入学する中学校への不安や期待が読み取れることから、大変有意義な活動となっている。

「総合的な学習の時間」での取組で、11月下旬から準備活動を開始する。3学期になってリハーサルを経て2月上旬の本番を迎える。活動時数は10時間前後である。1年前に自分たちが小学生として先輩たちから受けたプレゼンテーションを思い出し、それを超えるような内容にしようと努力している。

盤溪小学校へは徒歩での訪問ができないので、当日の発表を収録したDVDビデオを後日送付している。

当日の 流れ

- (1) はじめのことば
- (2) プレゼンテーション
- (3) 質問タイム
- (4) 合唱(校歌)紹介
- (5) 小学生から
- (6) おわりのことば



プレゼンテーションの内容

①	年間行事	・1年間の行事予定の説明
②	行事A	・入学式、新入生歓迎会、校外学習について
③	行事B	・合唱発表会、文化祭、陸上競技会について
④	1日の生活	・朝読書、休み時間、授業や給食など
⑤	きまりについて	・生活面でのきまり、服装や持ち物のきまり
⑥	学習について	・教科担任制やテスト、授業の様子や勉強のコツ
⑦	生徒会について	・生徒会組織や委員会活動を紹介
⑧	部活動について	・各部の取組や活動の様子、約束事など
⑨	100倍楽しむ	・「宮中いいとこ」のアドバイス

◆発表の留意点：

- 各グループの時間…準備、発表、撤収すべてを5分以内で
- 5分×9グループ＝45分間
- グループのつなぎ目の司会はしない
- 各グループの紹介テーマを分かりやすく伝えること
- 堂々とした態度で、きちんと発表すること



小学生の感想

- ・中学校のことが色々分かって良かった。 ・先輩方が頼もしく見えた。
- ・新しい勉強が楽しみになった。 ・入ってみたい部活のことが分かった。
- ・いろいろな発表の方法があることが分かった。 ・合唱がすごかった。
- ・たくさんの質問に、すぐに答えが返ってきてすごいと思った。

振り返りを次年度に生かす

- ・訪問当日は自分の役割をしっかりと果たせましたか？
- ・挨拶や礼儀作法はどうでしたか？
- ・プレゼンテーションの内容はどうでしたか？
- ・言葉遣いに気を付け、相手が聞きやすい話し方ができましたか？
- ・合唱（「校歌」または「あすという日が」）はどうでしたか？
- ・訪問の準備に熱心に取り組みましたか？

ポイント

- ◆ プレゼンテーションの内容を工夫し、小学生が中学校入学後の不安や戸惑いを解消し、期待感を膨らませるようなものとする。（交流で出た質問内容を次年度に引き継ぐことで、より具体的な紹介になるようにする。）
- ◆ プレゼンテーションの形態は、パワーポイント、クイズ形式、実演、実物提示、模造紙での提示などと多様化させることで、小学生の興味関心を高める工夫をする。
- ◆ 校区内の訪問しない小学校へ、発表を収録したDVDビデオを送付する。

ねらい

○中学校入学後に起こりそうなトラブルについて、中学校からアドバイスを受け、小学校段階から育てるべき力を想定して授業を構築。

授業づくりの経緯

今日、SNSや無料通信アプリの普及や新しいコミュニケーションツールの開発が進み、それに伴うトラブルが低年齢化してきている。

本校でも平成24年頃からソーシャルゲームに始まり、その後は携帯ゲーム機によるメール通信、さらに最近では無料通信アプリなどを使って放課後や休日にコミュニケーションをとる児童が増えてきた。

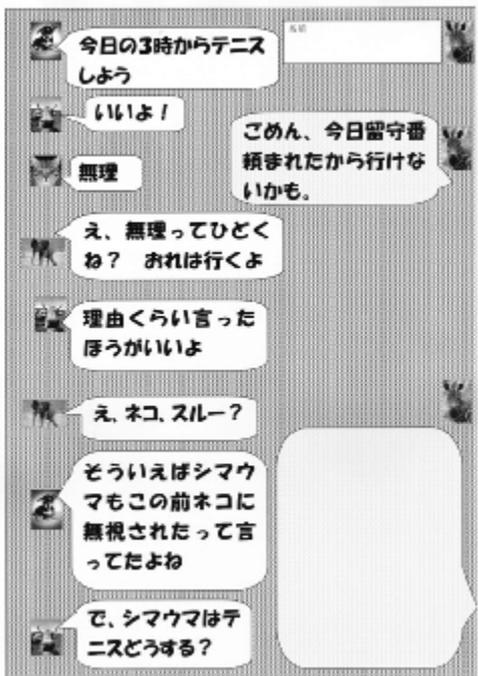
保護者の不安も時々耳にするようになり、地域の中学校ではどのような状況にあるのか、小学校が情報として知っておく必要があると考えたことがこの実践のきっかけとなった。

情報の交流を生かして

小中連携の担当者に連絡を取り、中学校でのネットトラブルの実態を詳しく把握している先生から話を聞く場を設定してもらった。

平成25年度、小学校においては携帯ゲーム機によるソーシャルゲームやメールのやり取りをしている児童は一部にいただけであった。しかし、中学校の実態を聞くと、トラブルの多くは無料通信アプリによるものであることが分かった。また、トラブルのきっかけとなっているのは、いわゆる悪口や仲間外しなど、日常の友人関係で起こるトラブルと同じであった。その一方で、ネット上のやり取りであるがゆえの指導の難しさも理解できた。

このように小・中学校の教員間での情報共有により、小学校の段階において、どのような指導が必要か、また、どのような指導方法が有効であるかについて、校内で検討を行った。その結果、自分が便利なツールを利用する立場になったとき、どうすべきかを6年生なりに判断させたいと考え、画面上のやり取りと直接顔を合わせる会話とでどのような違いと共通点があるかに気付かせるとともに、トラブルの事例を紹介する授業を道徳の時間に行うことにした。



授業実践 ～道徳～

- ①無料通信アプリ風の画面を拡大したものを会話の順に一言ずつ掲示していく。
- ②児童の反応を拾いながらポイントになる表現を意識付けていく。
- ③この画面上のやり取りにどう加わるかを考えて書かせる。
- ④書いたこととその根拠を交流させ、児童の価値観を見取る。



全国で本当
にあった10の
こわい話

- ⑤このやり取りを直接の会話として役割演技をさせる。その際、教師が演技に加わることで、文字のやりとりだけでは伝わらない事実が明らかになるようにする。
- ⑥役割演技を基に、画面上のやり取りと直接の会話の違いや共通点を考えさせ、交流させる。
- ⑦画面上のやり取りで生じる誤解や相手の状況や気持ちを想像することの重要性に気付かせる。
- ⑧「本当にあった10のこわい話」として、国内で実際に起こったトラブルを紹介する。
- ⑨まとめとして、ネット上でやり取りができる便利なツールを自分が使うとしたらどうするか、学習したことを基に考えさせる。

連携から 授業 づくりへ

これまで、「…はしないように気を付けましょう」というような注意をされてきていても、自分の事として捉えられていなかった児童に立ち止まって考えるきっかけを与えることができた点は成果と言える。しかし、「自分は気を付けるから大丈夫」という安易な判断もまだ多く、新しい情報を継続的に提示していく必要性を感じた。

ツールの急速な進化に合わせ、地域の現状を踏まえた実践を行うためにも、連携の継続は欠かせない。そのことによって、授業改善だけではなく、ニーズに応じた新しい授業づくりの可能性も広がる。授業を行った6年生の卒業後の様子も引き続き情報交流していきたい。

小中連携の素地

- ・それぞれに担当教諭がいる
- ・年に数回の交流がある
- ・カリキュラムに柔軟性がある
- ・保護者との連携がとれている

これまでの連携から見てきたこと

中学校入学後の不適應の主な要因としては、教育活動や授業形態の違いに適應できていないことだけではなく、友人関係の困難さから来る不安が大きいと考えられる。

ポイント

- ◆情報交流を生かすためには、形式的な場を設定することにエネルギーを注ぐよりも、必要なときに迅速に行うことができる関係を築いておくことの方が大切である。
- ◆社会や時代の要請を捉えることはもちろんであるが、学級や地域の実態に合わせた臨場感のあるやり取りを題材にすることで自分の事として考えられるようになる。
- ◆カリキュラムに位置付けることで、連携も実践も継続しやすくなる。

連携
年間を通じて継続的に会議を
設けて組織的に連携

小中連携担当者会議

～夏の授業体験、冬の交流会等のもち方について～

三角山小学校

ねらい

○中学校区内の各校に「小中連携担当者」を置き、「小学生による中学校の授業体験（夏季）」や「中学校の授業参観と小中交流会（冬季）」の持ち方を検討する。

小中連携
担当者
会議

宮の森中学校区には、大倉山小学校、三角山小学校、盤溪小学校の三つの小学校がある。宮の森中学校には、特認校である盤溪小学校に通う宮の森中学校区在住の児童を含め、大倉山小学校と三角山小学校のほとんどの児童が進学している。

中学校へ進学した子どもたちの中には、授業内容や生徒指導方針の違いに困惑する姿も見られた。そこで、このギャップの解消に向けて、宮の森中学校区では、平成19年度から英語を切り口とした小・中学校の連携が開始された。

本連携は、まず、5月に当年度のホスト校となる学校の小中連携担当者が声を掛けて集まる「小中連携担当者会議」から始まる。その会議の中では、各校の行事予定を確認しながら、「夏の授業体験（宮の森サマー・ステップ）」や「冬の交流会（宮の森ウインター・カンファレンス）」の日程や内容について話し合っている。

《 宮の森中学校区小中連携の大まかな流れ 》

	児童・生徒の取組	教員間での取組
5月		小中連携担当者会議① (年間計画の立案、日程調整)
8月	夏の授業体験 (小学6年生が中学校の授業体験、校舎・部活動見学)	小中連携担当者会議② (夏の授業体験打合せ)
		小中連携担当者会議③ (夏の授業体験反省、冬の交流会打合せ)
1月	宮の森いいとこ発表会準備 (中学総合学習の時間を使って、学校生活のプレゼン作成)	冬の交流会 (小学校教員が中学校を訪問し授業参観・意見交流)
2月	宮の森いいとこ発表会 (中学1年生が小学校を訪問し、中学校生活を紹介)	小中連携担当者会議④ (冬の交流会反省・宮の森いいとこ発表会打合せ)
3月		小中連携担当者会議⑤ (宮の森いいとこ発表会反省、中学入学児童引継ぎ)

長期休業
期間の
違いを
利用して

小・中学校が連携して、新しい活動を実施する上では、小学校・中学校における長期休業期間の違いが有効に機能していく。

中学校の夏季休業が小学校より長く、小学校で先に2学期が始まる

という休業期間の違いを利用し、中学校を会場として小学生対象の「夏の授業体験」を小学校ごとに2日間実施している。また、中学校の冬季休業が短いことを利用して、まだ冬季休業中である小学校の先生方が先に始まる中学校の授業を参観するとともに、参観後に『冬の交流会』を設け、子どもの育ちについて意見交流をしている。

夏の 授業体験

「夏の授業体験」～宮の森サマー・ステップ～とは、中学校の夏季休業中に小学校の6年生が訪問し、中学校英語の授業を体験したり、校舎や部活動を見学したりすることである。英語の授業では、小学校の外国語活動とのつながりを意識し、毎年内容や形態の改善を加えて実践している。授業後は、校舎見学、部活動見学を実施し、その際に顔見知りの卒業生から説明を受けることも、子どもたちにとって進学への不安を取り除く大きな要因の一つとなっている。

また、小学校の保護者にも授業を公開するとともに、中学校のPTA役員と交流する場を設定している。小学校の保護者にとっても、中学校が主催する入学説明会よりも少人数で行われるため、中学校生活について気軽に聞きやすいと大変好評である。

「冬の交流会」～宮の森ウインター・カンファランス～では、校区にある3小学校のほとんどの教諭が参加して、「中学校の授業参観・意見交流」を行っている。

本連携が始まった当初は、英語の授業のみの参観であったが、ここ数年は、数学や社会、音楽、理科など多様な教科の授業を公開し、分科会形式で交流を行い、指導方法や望ましい学習習慣などについて共通理解を深めている。今後は、特別支援教育についての交流も行う予定である。

中学校の生徒が、母校の先生から声を掛けられて、成長ぶりをアピールする姿は、大変誇らしげに映る。



ポイント

- ◆小中連携担当者会議を立ち上げ、互いの校種の交流を深める必要性を理解し、教師間や児童生徒間、教師児童間の関わりをもつ場面や機会を設定する。
- ◆小学校・中学校における長期休業期間の違いを上手く利用して、中学校へ進学する子どもたちの不安感を減らしたり、期待感をもたせたりする活動を検討する。

連携

教員間でグループ討議を重ね
連携を深める

9年間を通じて子どもたちを育む小・中学校間の 討議の工夫 ～教師の連携を深める～

西陵中学校

ねらい

- 地域の子どもたちを共に育む視点を持ち、共通理解を深める。
- 児童生徒の交流を通して共に学び合う喜びを経験し、児童が中学校生活への関心をもつとともに、児童との触れ合いを通して中学生の自己有用感を育てる。

グループ 討議誕生 の経緯

本校では、夏休みと冬休みに教師間の授業見学を行ってきた。発寒小学校・発寒東小学校との担当者会議の中で、「授業を見合うだけではなく、感想を交流し合ってはどうか」、「中学校進学後の子どもたちの様子を聞きたい」、などの意見が出された。そのような担当者のつぶやきから生まれたのが、現在も続いている「小中連携グループ討議」である。

討議の テーマ 設定

最初に挙げたテーマは、やはり、「中一ギャップ」についてであった。小学校2校と中学校の教師を六つのグループに分けて討議後、各グループでの討議の内容を発表し合う形式で行った。「中一ギャップはあって当たり前」、「中一ギャップの緊張感が良いスタートにつながって、充実した中学校生活を送っている事例もある」など、「中一ギャップ」をどのように捉え、どのような指導が必要なのかを共に考えるきっかけとなり、実りある討議となった。この討議をスタートにこれまで行ってきたグループ討議のテーマは以下のとおりである。



平成 22 年度「中一ギャップ」
平成 23 年度「学びを支える小中連携～学習と生活～」
平成 24 年度「学ぶ意欲を育てる指導～生徒情報交流～」
平成 25 年度「小中一貫した生徒指導
～道徳教育・日常指導の観点から～」
平成 26 年度「学習習慣の定着について」
平成 27 年度「基礎・基本を身に付けさせる学習習慣の定着」

〈グループ討議後の教師アンケートより〉

- ・気軽に情報交換ができる環境があることは、小中交流の成果として大変うれしく思う。
- ・お互いの学校でどのような学習をしているのかを踏まえ、つまずきやすい部分を知って授業を進めていくと、より学習を深められると感じた。小中交流の機会を大切にしたい。
- ・地域の子どもたちの学力向上のために、「交流」を通して共通に確認できることなどを、3校合同研究の成果の「形」としてまとめていくという意見は興味深い。

討議から 実践へ

このようなグループ討議の中から、教師のニーズに応え、授業づくり、学習・生活習慣づくりに関する連携や、小学生が中学校を訪問して行う授業参観や授業体験、中学校生活説明会など、様々な実践が生み出されていった。

さらに、教師間だけでなく児童生徒の交流の場面も設定したいと考える中で、「中学生による読み聞かせ」が行われた。これは、小学校の開放図書館の活動（PTA活動）との連携によって実現した取組である。真剣に聞き入る小学生の姿に中学生はやりがいを感じ、小学生は中学生に憧れを抱き、中学校生活への興味・関心を高める貴重な機会となっている。



<「児童からの感謝状」より>

- * 台詞の言い方など、学習発表会で使ってみたいです。
- * 紙芝居の絵の一つ一つが細かくて、とても上手でした。読み方も感情が入っていてさすが中学生だなと思いました。
- * 見ていくうちに結末が楽しみになりました。私たちの質問にも、全て答えてくれて、すごいなと思いました。私もそんな中学生になりたいなと思います。

成果と 今後の 取組

このように、本校の小中連携は教師同士の話し合いの中から出された疑問や課題の解決に向かう形で継続されてきた。さらに、地域の子どもたちを共通の視点をもって育てていこうとする教師間の意識が高まったことは、グループ討議を続けてきた大きな成果である。また、教師同士が気軽に授業づくりや生徒指導の課題について交流し、互いの実践から学び合う機会としても、グループ討議は大変有意義なものとなっている。今後、推進していきたい内容として

- ① 9年間を見通した学びの構築
- ② 小学生の中学校体験の充実
- ③ 外国語学習の接続に向けての連携 などが挙げられている。

地域の子どもたちの現状や課題を共通に理解し、中一ギャップに阻まれることなく9年間の義務教育の過程を伸び伸びと学び、それぞれの子どもがもつ可能性を広げていける教育活動の充実を目指したい。

ポイント

- ◆ 授業や子どもの活動を互いに見合う交流から始める。
- ◆ 身近で話しやすいテーマを選んで討議する。
- ◆ 地域の特徴や特性に共通理解をもち、地域の子どもたちを共に育てる視点に立つ。
- ◆ 小学校・中学校双方のニーズに応える取組とするため、担当者会議を適時行う。

接続

中学校での授業体験で
つなぐ（接続）

「中学校進学への不安が減ったよ」

～中学校での体験授業を通して～

宮の森小学校

ねらい

- 小学生のうちに、中学校での授業を体験することで、中一ギャップをできるだけ解消していく。
- 校舎を見たり、教師と話したりすることで、不安や心配を和らげる。
- 進学に明るい希望や意欲をもたせる。

夏休み明け けすぐに 中学校へ

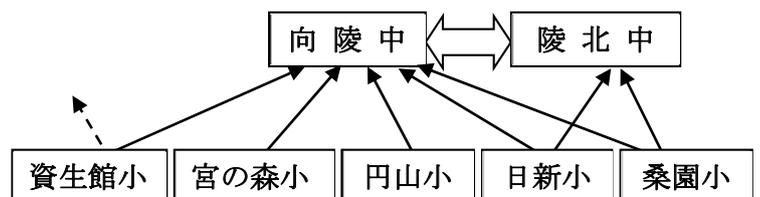
中学校での体験授業は、中学校の夏休みがやや長いことを利用して行っている。小学生は、2学期の始業式の翌日に中学校に行き、10時30分から45分間、授業を受ける。中学生はまだ夏休みのため、教室をそのまま使うことができる。

授業はクラスごとに違い、円山小学校の6年1組は算数、桑園小学校は理科、宮の森小学校の6年1組は英語、2組は社会、3組は国語というように様々な教科の授業が展開される。

本校の校区は向陵中学校の校区と重なるため、全員が向陵中学校で体験できるが、日新小学校や桑園小学校には陵北中学校の校区の子どももいる。一つの中学校で体験の場を作っても小学校では、クラスの半分を残して中学校には行けないため、限られた小学校だけの体験となりかねない。そこで、向陵中学校では、陵北中学校とも密に連携を取り、同じ日に体験ができるように設定している。そうすることで、進学する学校は違っても、クラス全員が中学校での授業を体験することができるのである。



大切な近隣校との連携



授業を受 けたこと で…

中学校に行って授業を受けたことで子どもたちの中学校への思いは確実に変化していた。

良かった点として次のような子どもたちからの意見が多かった。



- ・緊張感が和らいだ。
- ・校舎に入れたことで、雰囲気がつかめた。
- ・中学へ行くのが不安だったが、楽しみになった。
- ・こういう授業をしていくのかと分かり、心の準備ができた。

授業を受けた感想は以下のとおりである。

- ・思っていたより分かりやすくおもしろい授業だった。
- ・基本的なことができていないとだめだと気付いた。
- ・他の教科も学んでみたくなった。
- ・映像を使っていたので、分かりやすかった。

継続する
ことで成
果が…

中学校の先生が内容を工夫し、楽しく授業を進めてくださるおかげで、子どもたちは安心感をもち、期待を膨らませることができた。

向陵中学校では、この小中連携の事業に7年前から取り組み始めている。その結果、ここ数年、入学式当日に学校に来られないという子どもは一人もいない。また、小学校で不登校傾向にあった子どもが授業体験したことで不安が解消され、中学校から新たなスタートを切ることができた例もある。継続していくことで、着実に成果が表れている。

中学校の先生に
お聞きしました



Q：この事業で大変なことは何ですか？

A：中学校での学習の要素を入れながら、小学生にも分かる内容の授業を考えることです。授業を考えるのには苦労しましたが、新たな視点での教材研究となりました。

Q：小学生に勉強を教えるに当たり、工夫している点はありますか？

A：子どもたちが集中できるよう具体物を用意したり、映像を見せたりしています。

Q：続けるコツはありますか？

A：毎年新しい教材開発は大変なので、昨年の授業を少し変えたり、教科ごとに授業を相談して決めたりすることです。

ポイント

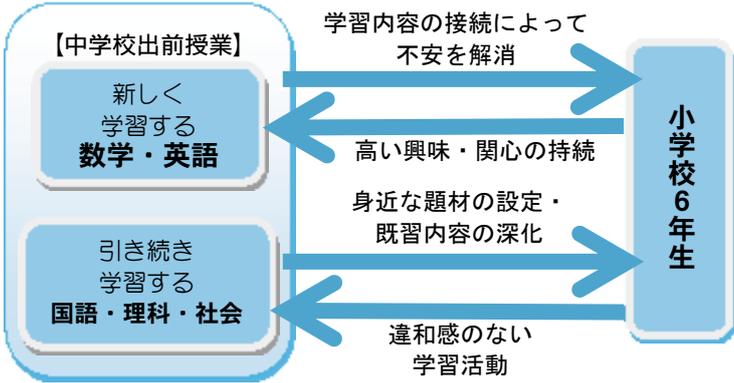
- ◆中学校では、体験授業と同じ日に新入生保護者説明会を設定しており、保護者も授業を参観することができる。子どもと保護者のどちらにとっても、新たな学校への不安感を解消できる場となっている。
- ◆小学校に対するメリットはもちろんのこと、中学校にとっても、次年度に入学する子どもの様子などを事前に把握できるよさがある。
- ◆体験する6年生は毎年替わるため、良い教材は毎年実施していくことが可能である。継続していくことが何より大切と言える。

ねらい

- 小学校から大きく変化する中学校の授業の形態や内容に事前に触れることで不安を解消し、安心して学習に臨める気持ちを養う。
- 「難しい」という先入観にとらわれがちな中学校での学習内容に取り組む中で、自ら課題を解決し「分かる」という実感を体験する。
- 期待の反面、不安も強い中学校生活に対し、オリエンテーションを通して理解を深めるとともに、中学校で求められることを小学校在学中から意識して生活できるよう促す。

**出前授業
で不安を
解消！**

本校では、小・中学校の夏季休業期間の違いを利用し、中学校教諭が小学校に出向く出前授業を行っている。授業については、毎年、国語・数学・社会・理科・英語の各教科をローテーションで行っている。数学や英語などは、中学校進学に伴い、高い関心をもって迎えられた教科であるにもかかわらず、入学後はむしろ苦手教科となってしまう傾向もあった。こうした現状を踏まえ、小中の連携として、小学校履修内容と違和感なく接続できる内容を中学校で吟味し、数学・英語のみならず、5教科で展開してきている。



**履修内容
の接続**

小学生の興味・関心を喚起し、不安や先入観を解消するためには、小学校と中学校の履修内容を接続させるよう教材の精選が必須となる。次に各教科の具体的実践例とアイデアを挙げる。

【国語】 古文を使った「現代仮名遣い」の学習

もし作文が古文だったら、という発想からオリジナルの古文を作成し、その作文内容の意味を推し量ることを通して歴史的仮名遣いを現代仮名遣いで読み直す授業であり、現代仮名遣いへ直す法則や古今異義語について理解を深めた。古文の題材としては、誰もが知るおとぎ話などを古文に直して提示するなどのアイデアも考えられる。

【社会】 身近なものを取り上げた環境学習

普段いつも口にしてしている「お米」を取り上げ、米の銘柄や北海道の農業（とりわけ稲作について）にアプローチしていく授業である。お弁当に使われるおかずのしきりに、アルミカップではなく海苔製の食べられるカップが使われてきていることを紹介し、エコや環境問題へとつなげていった。

【数 学】 正の数・負の数の導入学習

「+」「-」を用いる身近な例を考えさせ、気温の例をクローズアップし、温度の高低から数の大小関係を理解する授業である。その後はグループに分かれ、トランプを使った数の大小ゲームへと発展させた。

このほかに、生活に密着した例を使った数的推理の問題などは、クイズ・パズル的に興味をもって取り組めるため有効と考えられる。

【理 科】 正しいスケッチの方法を理解する学習

観察記録として描かれたスケッチと、美術的な技法を用いて描かれたスケッチを比較し、その違いに気付くことで理科において行われるスケッチの在り方を理解する授業である。その後はスケッチの方法を確認しながら、実際に植物の葉を描く作業を行った。

このほか、小学校の理科室を使用して実験時の危険性や注意点を理解させる演示実験なども授業内容のアイディアとして考えられる。

【英 語】 会話を通してコミュニケーションを図る学習



小学生にもなじみのある英会話フレーズ“My name is ~”や“Nice to meet you.”を使って、あらかじめグループ分けされた仲間を探し出すという授業である。グループはアニメのキャラクターなどを用いて親しみやすさを考慮した。その後の展開ではチャンツを取り入れた。

このほか、ALTを活用した授業や、英語の歌を取り入れた授業なども小学生の関心を高めるのに有効であると考えられる。

求められる 態度の 育成

授業後は、中学校と小学校の違いをより理解できるよう、中学校教師から中学校生活のオリエンテーションを行っている。さらには質疑応答を通して個々の不安感を取り除くことにも寄与している。また、中学校生活において、①言葉遣い ②挨拶の励行 ③マナー ④学びの姿勢 ⑤家庭生活の充実 が求められる態度であることを「五つのカギ」として事前に提示し、残りの小学校生活でそれらを意識した生活を送れるように心構えの啓発にもつなげている。



ポイント

- ◆ 英語・数学への関心が高いのが小学生の特徴であるが、その他の教科であっても教材を工夫することで、十分に興味をもって授業活動を展開することができる。
- ◆ 中学校の授業の在り方や形態に触れることで、不安感を払拭することができる。
- ◆ 事前に中学校生活について学習することで、中学校入学後も委員会活動・部活動・先輩との交流・生活の規則などに戸惑うことなく順応することができる。

接続

総合的な学習の時間で
つなぐ（接続）

「ポロカル発信会に参加しよう」

～自らの学習にフィードバックさせる学習を目指して～

福移小中学校

ねらい

- 自ら課題を見付け、調べたりまとめたりしながら自分の考えを表出させる学習を系統的に学ぶことができるようにする。
- 小学生にとっては、これからの自分たちの学習（社会科や総合的な学習の時間の探究学習）に生かせるように、自ら目的をもって参加し、中学生の課題の設定や主張点のよさ、プレゼンテーションソフトの効果的な使い方などを学ばせる機会とする。
- 中学生にとっては、今まで積み上げてきた調査や考察が確かなものであるかを再認識する機会とする。

ポロカルとは？

福移中学校の総合的な学習の時間では、札幌の文化（これを本校では「サッポロカルチャー」、略して「ポロカル」と呼ぶ。）をテーマに調査・探究活動を行っている。「札幌のより良い暮らし」「札幌の人々の幸せ」を考えるために、「都市の農業の共存」「図書館の在り方」など、中学校3年生は一人一人が、中学校1年生と2年生はグループで課題を設定している。それらの課題に対してどのような問題があるのか、自分ならどう考えていくのかについて、現地取材を加えながら調査を行っている。



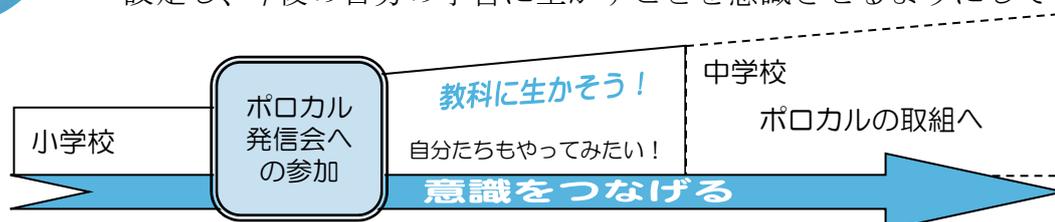
その発表会である「ポロカル発信会」では、小学5、6年生が中学生の発表を参観している。プレゼンテーションソフトを使い、写真やグラフを示しながら堂々と意見を主張する中学生に憧れのまなざしを向ける小学生の姿がある。



本校は小学生と中学生が同一校舎内で毎日と一緒に過ごしているが、お互いにどのような学習をしているのかなど、授業の様子を直接見る機会は多くはない。小学生にとっては、この活動によって中学生になるとどのような学習が行われるのかなど、中学校での学習の雰囲気をつかむこともできる。

学びをつなげる

「ポロカル発信会」への参加は、5、6年生の総合的な学習の時間の学習計画にも位置付けられている。5、6年生の「学習カード」には、中学生の発表に対する感想のみにとどまらず、「発表の仕方の良さ」や「これからどのような学習に生かしていきたいのか」などの項目を設定し、今後の自分の学習に生かすことを意識させるようにしている。



学習カードからは、他教科等の学習にもつなげようという意識の高まりが見られた。



中学生の発表の仕方のどんなところがすごかったかな？

- ・緊張しないで言っていて、ぼくとは比べものにならないほど良かった。
- ・質疑応答でたくさんの質問を受けていたけどはっきり答えていてすごい。
- ・大事な言葉や強調したいところ言葉の時に声の調子を変えたり、ゆっくり話したりすることで聴衆を引き付けていた。
- ・自分は細かいところは調べずにすぐに書いてしまうので、次からは細かいところも調べていきたい。

これからどんな学習に生かしたい？ 自分ならどんなことを調べてみたい？

- ・グラフや表を使って説明をする国語の時間に、聞きやすく話せるように生かしたい。
- ・中学生になったら現地に行って調べて、将来のために役立てたい。
- ・将来の夢が助産師さんなので、助産師さんのことを調べてみたい。
- ・来年の5年生に宿泊学習のことを教えるときに、聞きやすくて分かりやすいように伝えたいと思った。

この学習後には、6年生の社会科の「世界の国調べ」等の学習や「北海道のよさ」等を題材にした修学旅行のまとめなど、自らテーマ決めて発表する場を設定し、考えを整理し、プレゼンテーションソフトを使って発表する形態を意識的に取り入れている。

中学生から小学生へ

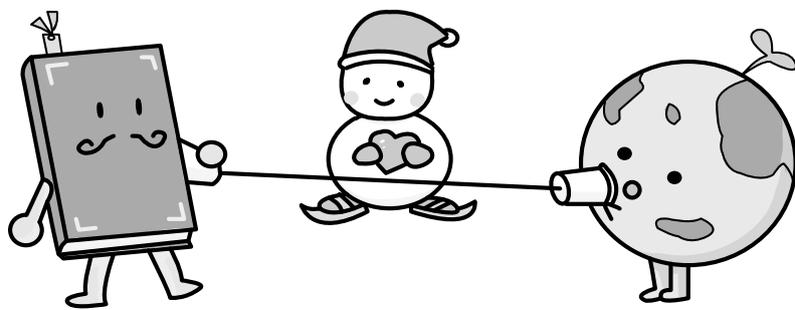
小学生の学習カードの内容は、次時に生徒に紹介している。自分が苦労して考えたこと・まとめたことを素直な言葉で評価してくれたことに対して、中学生は素直に喜び、自信をもつ様子が多く見られた。中学生は、後輩へアドバイスをするという意識が強く、中学校1、2年生だけではなく、自分たちが頑張ったことを小学生に認めてもらい、それを少しでも生かして頑張りたいという思いがあふれた学習となっていた。

感想を読んでどう感じましたか？

- ・「興味をもった」「印象に残っている」と書いてくれる人が多く、このテーマで発信できてよかったと思う。
- ・小学生にも自分の言いたいことが伝わったのか不安だったけど、きちんと伝わっていて嬉しくなった。
- ・何となくでは、良い発表にならないから、たくさんの人に見てもらって、いろいろな視点からアドバイスをもらった方がいいと思った。
- ・小学生からたくさん質問をもらったけど、きちんと落ち着いて答えられてよかった。しっかり調べておかないといけないと思った。

ポイント

- ◆新しいことを計画するのではなく、今までに学習している内容を結び付ける。
- ◆学習の目的を「中学生は自分たちの学習の確認」「小学生は自分たちの学習を深めるため」というように考えることにより、新たな小中のつながりが見えてくる。
- ◆活動や学習のつながりを意識して小学校と中学校のそれぞれの教育課程に位置付けておくことで、系統的な学習として見通すことができる。



第3章

小中連携の効果と 今後への期待

I 小中連携の効果について

II 今後への期待

【資料】

第3章 小中連携の効果と今後への期待

I 小中連携の効果について

小中連携 の効果

小中連携の取組による効果については、各学校の実情や児童生徒の実態、地域の環境等により様々であるが、本手引第2章における事例からは、以下のような効果が見られている。

- 小学生の中学校進学への期待感の向上、不安感の軽減
- 中学生の自己有用感の向上
- 教職員間の子どもの実態等に関する情報共有の充実
- 校種を超えた創意工夫による教育活動の充実
- 9年間の連続性や系統性を意識した教育への発展

効果を 高める ポイント

これらの効果については、各学校が小中連携の取組によって子どもに「育てたい力」(=「目標」)を明確にし、その目標に基づいて、校種を超えた意見交換等を通じて、よりの確な活動等の企画に努めるとともに、必要に応じて不断に見直し、改善を図ってきたという努力と創意工夫によるところが大きい。第2章の事例から、小中連携の取組によって児童生徒の成長を促すよう効果を高める上でのポイントについては、以下のようにまとめることができる。

- 子ども自身が目標や目的をもって主体的に参加できるようにすること
- 子どもの発想や企画を生かしたり、運営等に主体的に参画する機会を設けたりすること
- 教職員が、互いのニーズを踏まえて、必要な情報を共有し、共通のテーマで意見交換・授業交換するなど、交流を充実すること
- 継続的に取り組める活動を教育課程上に位置付けること

主体的な 取組を 生かす

小中連携の取組においては、米里小学校の「中学校の合唱コンクール参加」の事例に見られるように、子ども自身が、「自分たちの歌声を高めるために先輩から学びたい」などと、何を学びたいのかを自覚して活動に参加できるようにすることや、宮の森中学校の「中学生による小学校訪問」の事例に見られるように、例えば、中学生自身が先輩として、交流活動等の企画・準備に主体的に取り組み、小学生の不安

や戸惑いを解消し、期待感を膨らませる活動を進めるなど、子ども自身が目的や目標をもって参画すること、また、子どもの発想や企画を生かすことや運営等に積極的に参画する機会を設けることなどが大切である。

このような子どもの育ちを中核に据えて小中連携を進めることは、校種を超えて教職員が連携していく上で、大変重要な視点である。何のための小中連携なのかを常に意識していくことにより、教職員間の連携を活性化させるようにしたい。

組織的・ 継続的な 連携

小中連携の効果は、子どもへの直接的な教育効果にとどまらない。例えば、宮の森小学校が実践した、小学生が中学校の教員から学ぶ「中学校での体験授業」の事例では、中学校の教員が、これから進学してくる児童の実態等を把握できるよさがあるとしている。

複数の小学校から一つの中学校に進学する中学校区が多い札幌市においては、この情報共有は大きな課題の一つとなる。三角山小学校・大倉山小学校・盤溪小学校と宮の森中学校の小中連携の事例では、「小中連携担当者会議」を設置し、定期的に情報共有を図っている。各校の実務担当者が中心となって、小中連携の取組を計画的、組織的に進めていることが、毎年度、より良い活動へと発展させていく上で効果を発揮している。

創意工夫 を生かす 意見交換

こうした会議の運営に当たって、西陵中学校では、発寒小学校・発寒東小学校との連携において、「小中連携グループ討議」という進め方を取り入れ、教職員間の討議自体にも工夫を加えている。校種の異なる学校間の双方のニーズを率直に出し合い、実態を踏まえた意見交換を進めることで、小中学校の実態に応じつつ、教職員が創意工夫を生かした活動へと発展させていく効果が見られている。校種を超えた意見交換が密に行われることによって、多彩な活動が生み出されている。

教職員の 密な 関係性

一方で、子どもの発達段階や社会の変化を踏まえて、小中連携の仕組みを生かした授業を臨機に企画して実施するためには、定期的な会議による打合せだけでなく、日頃からの連携関係を築いておくことが重要であると言える。美しが丘緑小学校では、児童の実態や保護者の声、中学校の教員との相談を踏まえて、中学校でのネットラブルの実態等を題材とした授業を取り入れている。日頃から情報共有や意見交換を行う関係性が基盤となって、教育課程の充実につなげることも、小中連携の一つの効果と捉えられる。

小中連携 の 教育課程

市内各校で見られる取組の一つに、中学校教員の出前授業がある。この取組の効果は、米里中学校の事例に見られるように、子どもたちが「難しい」と感じやすい中学校の学習について、小・中学校の履修内容の接続を意識した学習内容となるよう、教材を精選するなど教育課程を工夫することにより、学習への不安を軽減する点が挙げられる。中学校教員による授業の進め方等を知ることで、小学校の教員にとっては、自らの授業を見直す機会ともなる。指導方法の接続という観点での効果が期待される。

教育課程の連続性や系統性という観点では、例えば、「総合的な学習の時間」の効果的な活用が福移小中学校の事例に見られる。福移中学校では、「札幌の文化」をテーマとして、調査・探究活動を行い、その結果を小学生に対して発表する機会を教育課程上に位置付けている。これを小学校の教育課程にもリンクさせる工夫を行っており、小学生には、自分も進学したときに取り組む活動であるということ意識しながら中学生の発表を見聞きする場を設定している。

このような教育課程上の位置付けは、小中学校の教職員が9年間の教育を通じて子どもを育てていくという共通認識をもち、ともに教育課程を編成していくという前提で意見交換することにより進んでいくものである。

また、教育課程における工夫は、継続的な取組を確保することにつながり、小中学校間の協働的な教育活動として深く根付いていくことが期待できる。

Ⅱ 今後への期待

計画的・ 組織的な 実践に…

現在、札幌市においては、各学校の実情等に応じて、小中連携に係る多様な実践事例が蓄積されてきており、この10年ほどで、その可能性を大きく広げてきたと言える。小・中学校間におけるより深い相互理解、小学校児童の不安解消・期待感の増大などの効果を踏まえ、今後も、小中連携の取組について充実を図ることが望まれるところである。

そのためには、年間を通じて小中連携の取組をどのような目標で、いつ、どのように進めるのか、また、その評価をどのように行うのかなどについての計画を小中連携の教育課程として明確にし、充実を図っていくことが重要である。

小中連携 での教育 課程編成

教育課程上の位置付けについては、各学校の実情等に応じて多様な工夫の可能性があるが、例えば、現在実施している交流行事について、特別活動の教育課程の位置付けを見直したり、総合的な学習の時間で実施する職場体験を伴う学習について、小・中学校間で、ねらいや活動内容等の関連付けを検討して、連続性を確保したりするなど、現状

テーマを設定した 意見交換

の見直しから進めることが考えられる。

また、小中学校の教職員が互いの知見を発揮し合い、新たな学習活動を創出することも一つの方法である。例えば、「思考力の向上」や「ネットモラル」など、学校としてニーズの高いテーマを設定して、子どもの課題やその改善のための方策などについて意見交換をする機会を設けることなどから始めることも考えられる。

「学ぶ力」の育成を例にすれば、現在、各小・中学校が作成・実行している「学ぶ力」育成プログラムを資料として、「基礎的・基本的な知識及び技能」の習得や、「学ぶ意欲」、「思考力・判断力・表現力等」の向上などについて、義務教育9年間で育てるという視点から意見交換し、「子どもの学力のどの側面をより高めることが必要か」など、目指す子どもの姿や指導観、評価観、指導方法などについて共通理解を深めていくことが考えられる。

また、生徒指導の観点から、中学校における問題行動等の未然防止に係る生徒指導の在り方などをテーマに意見交換し、小学校段階での指導の在り方を義務教育9年間という視点から見直してみることなど、実践から学び合い、指導方法等の改善につなげることなども有効であると考えられる。

教職員間の意見交換等においては、このようなテーマ設定が重要であり、教育課程の充実、指導方法等の改善に資するよう設定に配慮することが大切となる。

こうした教職員の取組は、子どもたちへの教育に好影響を与えるとともに、保護者等からの信頼を高めるという点でも効果的であると期待される場所である。

小中一貫 教育の 可能性

第2章において、小中併置校である福移小中学校の事例を掲載している。施設一体型の環境を生かして、より一層、密に小中連携を図っている事例である。

とりわけ、教育課程上の連続性、教職員の協働について工夫が見られており、小学校から中学校へと、子どもたちの学習意識が連続されるよう教育課程の編成と実施を進める観点から、市内の他中学校区における小中連携の取組を発展させていく上で、施設の一体・分離を問わず参考になる点が多いと考えられる。

学校教育法等の一部改正により、平成28年4月以降、小中学校9年間の義務教育を一貫して行う義務教育学校の設置が可能となった。この制度に基づく小中一貫教育の推進については、今後、札幌市においても教育効果や地域性等を踏まえて導入の可能性を検討することが求められるが、その際の視点としては、本手引に掲載している事例から、以下の点を参考にすることが考えられる。

- 「目的を共有」
 - ・小中一貫教育を通じて、どのような子どもの育ちを目指すのかという教育活動の目的を共有すること。
- 「協働で計画・実行」
 - ・目的の達成に向けた具体的な教育活動の計画の段階や、その実現に向けた実行の段階で協働すること。この中には、学校間の乗り入れ授業や、児童の授業体験、児童生徒の交流活動などが計画的に行われることも含む。
- 「コーディネート機能」
 - ・そうした取組を円滑に進めるためのコーディネート役を担う担当者会議等が機能を果たすこと。
- 「小中一貫教育の観点での教育課程の編成」
 - ・どの教科等を、どの程度、どのような方法で一貫させていくのか、教育課程としての位置付けを明確にすること。

義務教育9年間を通じた教育の推進については、多くの教科・領域・活動のカリキュラムの接続・統合を図り、小中一貫校として位置付けることが可能となったが、現段階では、札幌市においては、子どもが複数の中学校に進学する小学校も多く、小中一貫教育を実施するには整理すべき点がある。

このような中であっては、各小・中学校において、小中連携の取組を通じて、子どもの姿を軸にしながら、「学ぶ力」育成プログラムや「健やかな身体」育成プログラム、生徒指導などを小・中学校の連携で進めるなど、小中一貫教育の理念を生かしながら取り組むことが考えられる。

【資料】

平成 22～26 年度の札幌市研究開発事業における「小中連携」に関する実践研究の成果等について

年度	「小中連携」に関する実践研究 成果（○）と課題（●）
22	<p>（成果と課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校全体の教育課程をプランニングするために、教務担当者が互いの校種の理解を深めるための会を開催し、児童・生徒の豊かな個性を認めた。 ○低学年でのロールプレイングを交えた道徳の授業により、これからの学校生活において欠かせない行動規範が育まれていく姿が確認できた。 ○長期休業期間を利用した体験授業・部活動見学・保護者への説明が大変に有効である。 ●学校全体の教育課程をプランニングしていく中で、小中が互いを理解していくことが必要である。
23	<p>（成果）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中一ギャップを生み出さないために、「ものごとを最後までやりとげて、うれしかった」という経験や、「ノートを丁寧に書こう」とする努力を捉え、適切な目標に向けて成長を促す場面「中一ステップ」を実現させる着眼点として、授業で自分の考えを話すことという子どもの育ちをもつことができた。 ○小学校での授業を参観し、小学校の学習内容を意識した中学校での授業が各教科で行われるようになっている。 ○学校行事や総合的な学習の時間等、地域の同じ施設を活用している場面があり、共通した指導を進めることができそうである。 ○同じ新聞記事を活用しての道徳授業や、小中の発達の段階を考慮した教科指導など、英語以外にも広げていきたい。 ○学年が進むごとに地域との関わりが薄れているが、行事に参加する立場から、行事を企画したり、地域のために取り組めること、例えば、雪かきのボランティアなど発達の段階に合わせた企画を計画したりするなどが今後も必要である。 ○小中連携の取組の柱と継続的に実践できる体制が構築できた。
24	<p>（成果）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○9年間を通してどのような子どもに育てるかがポイントである。小・中学校で一本筋の通った目指す児童像・生徒像をつくっていくことで、様々な問題の解決の糸口になる。モラルの低下、学習に対する意識付け、中一ギャップの解消等、多くの課題の解決につながる。 ○今まで何気なく行ってきた活動が「小中連携」というフィルターを通して見直すことで、意義や工夫改善の方向性に気付くことができる。 ○小・中学校の教員は、6年生の「引き継ぎ」での児童生徒理解に対する物足りなさを感じている。小中連携を進めることで、子どものための小・中学校をつくっていく必要性を再確認できる。

25	<p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究推進校においては、具体的な取組を通じて、小中連携の目的や必要性の理解が進んできている。 ○小・中学校ともに、具体的に進めていくことによって、指導方法やその内容について、校種の違いを互いに理解することができる。 ●教師間で成果を共有することが必要である。 ●推進していく効率的な体制づくりが必要である。 ●児童生徒の実態を把握した上で、小中連携の目的・目標を設定していくことが重要である。
26	<p>(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○交流会の内容を協議できる担当者会議の必要性について確認でき、交流会でのグループ分け、体験型の授業参加などの実践を行った。 ○実践が日常的に実感していた小中連携に関わる指導における課題の解消や、教職員個々の指導工夫改善の取組の一助となった。 ○地域の子どもへの共通の課題意識を起点として始めた本事業が、小・中学校の教職員間で互いにその成果と課題を実感しつつ、さらに次年度に向けた発展的な実践の模索へとつながりつつある。 ○「校種、教科を超えて参観することで指導方法などの情報交換等ができ、自分自身の指導にフィードバックすることができる」「専門性をもっている中学校の先生が小学校で指導することで更に効果を上げることができる」「小中合同で授業することにより児童生徒の意欲が高まり、協働の活動が期待できる」など、児童生徒のみならず、教員側においても連携の大切さや効果を感じられる。 ●小学校と中学校、それぞれの学年で積み上げてきた学習や活動・取組がどのようなつながりであるのかを明らかにすることが重要である。

平成 27 年度札幌市研究開発事業「小中連携」に係る実践研究

【小中連携推進委員会】

委員長	柏中学校	校 長	蛭名 嘉津夫
副委員長	大倉山小学校	校 長	類家 齊
委員	真栄中学校	教 頭	大道 弘孝
	宮の森小学校	教 諭	品田 亜希江
	三角山小学校	教 諭	柴 野 徹
	福移小学校	教 諭	佐々木 修治
	米里小学校	教 諭	紙谷 健一
	美しが丘緑小学校	教 諭	佐藤 雅世
	宮の森中学校	教 諭	五十嵐 仁
	米里中学校	教 諭	曾田 政人
	西陵中学校	教 諭	小澤 史子
事務局	札幌市教育委員会	指導主事	佐藤 圭一
		指導主事	船着 千世
		指導主事	野田 隆之

小中連携の手引

平成 28 年 3 月発行

編 集 札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当課
発 行 札幌市教育委員会
札幌市中央区北 2 条西 2 丁目
印 刷 富士プリント株式会社

